



# 令和3年度 自衛官候補生入隊式



## 決意を胸に

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1佐）は、令和3年4月5日、秋田駐屯地において、「令和3年度自衛官候補生入隊式」を実施した。春の日差しを浴びながら、整然と隊列を成した初々しい姿の自衛官候補生（以下：自候生）44名は、式が始まると区隊長からそれぞれ名前を呼ばれ、任命された。

そして入隊者を代表し吉田翔栄自補生が入隊を申告、引き続き山方優輝自補生が「自衛官候補生として名誉と責任を自覚し、知識及び技能の修得に励むことを誓います」と力強く宣誓した。

執行者の五十嵐連隊長は式辞において、「使命感と誇りを持って」「自らを鍛え、仲間と団結し、困難に立ち向かえ」の2点を要望し、「自衛官として、また立派な社会人として成長できるよう、しっかり修養してもらいたい」と激励した。その後ご来賓の方々からお祝いの言葉を頂くとともに、第1中隊佐藤優馬士長が先輩隊員として激励の言葉を述べた。

入隊式後に新聞社の取材に自衛官候補生を代表して答えた白川一希候補生は「国民から頼られる次の世代の未来を守る自衛官になれるよう日々訓練に励みます」と抱負を語った。

春もまだ浅い風の中、自候生たちは自衛官としての一步を踏み出した。



# 令和3年度 自衛官候補生入隊式



自衛官候補生たちによる申告



山方候補生による宣誓



佐藤士長による先輩隊員激励の言葉



五十嵐連隊長による式辞



取材に答える白川候補生



集合写真



# 防衛・駐屯地モニター 終了及び委嘱式



## 地域と共に

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐 1 佐）は、令和 3 年 4 月 13 日、防衛・駐屯地モニター終了及び委嘱式を行った。

式では今年 3 月で終了したモニターの方に修了書を、引き続き新規モニターの方には委嘱状を手渡した。

五十嵐司令は「2 年間ご活躍されました皆様、本当にありがとうございました。今後ご意見、ご要望がありましたらお気軽に駐屯地へご連絡ください。また、新たに委嘱された皆様、よろしく願いいたします。訓練や行事等をご案内させていただきますので、ぜひご覧になられて忌憚のないご意見を頂けたらと思います」とそれぞれに謝辞を述べ挨拶した。

式終了後、これから各モニターとしてお付き合頂く委嘱者の方に対し駐屯地をご案内させて頂いた。見学中は古くからの資料等の説明、現在の教育風景や自衛隊車両などのご案内をすると、初めて見るものばかりと、喜んでいただいた。

この度の終了・委嘱式を迎えるにあたり皆さんに感想を伺うと、終了者の方々は「日常生活では自衛隊の活動は知らないことが多い。楽しい 2 年間でした」「音楽まつりに招待されたことが一番の思い出。とても和むひと時でした」と、活動期間を振り返って思い出を語られ、委嘱者の方は、「自衛隊の存在価値が注目されるこの時代、これを機会に自衛隊のことをどんどん知っていきたい」と意気込みを述べられた。



# 防衛・駐屯地モニター 終了及び委嘱式



委嘱者に対する自衛隊の紹介



式の様子



終了書の授与



五十嵐連隊長による挨拶



委嘱状とモニター証明書の授与



駐屯地案内で訪れた駐屯地史料館



## 令和3年度岩手山演習場春季統一整備



### 訓練の充実を目指して

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐1佐）は、令和3年5月6日から11日までの間、岩手山演習場において、令和3年度岩手山演習場春季統一整備を実施した。

連隊は主として幹線道路と小火器戦闘射場の整備・補修を担当し、練磨の道場たる岩手山演習場の整備の任務に臨んだ。

幹線道路の整備については、道路沿いの除草と経年劣化した側溝等の補修を、小火器戦闘射場の整備については、新たな演習場運用構想である連隊規模の戦闘射撃が可能な戦闘射場を目指し、隣接している林を切り開き、射場を拡幅した。また、徹底した安全教育が行われ、機械操作や危険見積りはもちろん、小まめな手入れによる性能の維持に至るまで、教育された。

本演習場整備は五十嵐連隊長が要望した『作戦と捉え取り組み各種能力を向上せよ』『完全性・安全性・有効性・効率性を追求せよ』

『隊員一人一人が自ら考え工夫し積極的に意見提言せよ』の3点を基軸に全隊員が一丸となって取り組んだ。宿泊地域への進入から各種準備、その後の整備から撤収に至るまで全てを作戦と捉え、あらゆる場を活用し隊務の総合一体化を成して整備任務を全うした。

各整備地域において本整備野営への意気込みを聞いてみると、重迫撃砲中隊 佐々木董1士は「2回目の整備野営なので前回学んだ事を生かして頑張りたい」と述べ、本部管理中隊 橋本達也幹候は「幹部候補生として実員指揮を伴う整備野営に臨むにあたり、絶好の機会と捉え、今後の資となるように取り組みたい」と語った。その他の隊員たちもそれぞれの立場で本野営の任務を達成すること、その中から更に成長したいということ語っていた。

延べ6日間に渡って行われた整備は、隊員たちの確かな成長の果てに、練磨の道場たる岩手山演習場を更に充実した訓練場へと進化させ終了した。



# 令和3年度岩手山演習場春季統一整備



戦闘射場の拡張工事



幹線道路の補修



損傷度合いを検証し補修内容を話し合う



道路脇の草刈り



チェーンソー整備



階段の整備





# 陸空女性自衛官 意見交換・交流会



## 大空と大地を紡ぐ

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐 1佐）は、令和3年5月24日秋田駐屯地において、陸空女性自衛官意見交換・交流会を実施した。本行事は陸上自衛隊秋田駐屯地（以下：陸自）及び航空自衛隊秋田救難隊（以下：空自）による両部隊の友好を深めるための第1弾として、また互いの職場環境から見た意見交換による女性隊員の更なる活躍推進のため行われた。

当日、到着した空自隊員の方々は若干緊張した面持ちで訪れた。本部隊舎前に降り立つと、初めて秋田駐屯地に来た隊員が、興味津々に駐屯地を見渡していた。初めに本日の流れを説明した後、隊員食堂で秋田駐屯地の昼食を満喫し、昼休みを挟んで女性隊員生活隊舎、駐屯地史料館、平素の訓練等を見学した。

そして教場において、待望の意見交換・交流会が始まった。当初各隊員の自己紹介から始まり、出身地や職種などの他に自衛隊の中から陸上を選んだ理由や各職場での結婚事情などが語られた。特に陸自側がほぼ地元出身者なのに対し、空自側は参加者全員が他県出身という大きな差に両隊員ともに驚いていた。その後階級ごとのグループに分かれて懇談し、今後拡大していく女性隊員の未来や、後輩隊員の指導、隊内生活の在り方など、様々なテーマで語られ親睦を深めていった。

やがて楽しいひと時はあっという間に過ぎ去り、空自の車両が帰路へ向かい動き出すと、双方の隊員が手を振り合い、別れを惜しんだ。別れ際にそれぞれの隊員に感想を聞くと「交流するまでは相手の部隊は別世界・特別な社会と感じていた」「実際に話してみると、自分たちと一緒にあり、すごく親近感が沸いた」「次は救難隊を訪れてほしい（伺いたい）」と口をそろえて同じ思いを語っていた。

本行事はあくまで部隊友好の始まりの一步である。同じ県に所在する自衛隊同士、より密接に繋がり、円滑な連携が取れる朋友として更なる活躍が期待される。



# 陸空女性自衛官 意見交換・交流会



駐屯地食堂での昼食



生活隊舎の見学



陸上自衛隊員の自己紹介



駐屯地史料館の案内



階級ごとの意見交換会1



階級ごとの意見交換会2



# 体力検定優秀隊員



## 努力の人

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1 佐）の本部管理中隊 田中凜々子 1 士は、体力検定優秀隊員として選抜され、第9師団の顕彰板に列された。

体力検定は自衛官の身体能力を表すのに一番明解なものである。約千人の連隊の中で最も優秀と選抜されたのが田中 1 士である。

入隊以来抜群の身体能力を発揮している田中 1 士は、学生時代にはバスケットボールや陸上競技で汗を流したという。しかし入隊前は腕立て伏せが一回も出来なかったと告白する彼女は、文字通りゼロからのスタートで毎日腕立て伏せに取り組んだ。そしてその努力は体力検定全種目満点の 1 級という、輝かしい結果を打ち立てた。

しかし、とある先輩隊員は「彼女の功績は名誉を求めた結果でなく、目の前の小さな目標を一つずつ達成して辿り着いたものです。記事にするにあたって『完璧』という虚像が独り歩きするような表現は避けてもらいたい」と語る。地道な努力を知らない無責任な賛辞によって彼女が傷つくことを危惧した言葉であった。

パーフェクトな結果を出した彼女は片手間で何でもこなすパーフェクトな天才ではなく尊敬すべき努力の人である。彼女の努力に最大限の敬意を表するとともに、誤解が無いよう断りつつも、それでもこれからの更なる躍進に期待したい。



# 体力検定優秀隊員



腕立て伏せ



腹筋運動



3000m走



# 東京オリンピック聖火ランナー



## 78億人の負託

令和3年6月9日、東京オリンピック聖火ランナーに選考された第105施設直接支援大隊第2直接支援中隊秋田派遣隊 福地 隆安1曹は、郷里の大地を颯爽と駆け抜けた。

「沿道の応援の方、リレーを支えてくださるスタッフの方と一体になり微力ではございますが夢と希望を発信したい」福地1曹は聖火ランナーに応募した際にこの様にコメントを送っている。初夏の日差しがじんわりと肌を蒸し上げる中、緊張した面持ちで聖火を待つ福地1曹の横をパトカーに先導されたスタッフが注意事項を伝達しながら軽快に踊り抜ける。大声での応援の禁止、ソーシャルディスタンスの確保、並走の禁止等、安全確実に聖火リレーを完遂するために多くの人が汗いっぱいの笑顔で運営していた。聖火が近づくにつれて先導者の一台が福地1曹を紹介すると、沿道の人々が身振り手振りで声援を送り、見学者からカメラを向けられるとはにかみながらポーズをとっていた。

やがて前ランナーから聖火がもたらされると、一気に緊張感が高まった。オリンピアから始まり、何人もの手を渡りながらやってきた聖火、僅か数分であってもこのひと時だけは、78億人の中で唯一人の聖火の担い手となり世界の負託を受ける。緊張と興奮が入り混じった表情で聖火を受け取ると、福地1曹は走り出す。声なき声援が沿道から湧き上がる中、永遠とも思えるひと時はあっという間に過ぎ去っていく。次のランナーへと聖火を繋ぐと、安堵の表情で肩の荷を下ろしていた。

帰途の際に話しを聞くと「とにかく終始緊張しました。無事に聖火を繋げることが出来て安心しました」と満面の笑顔で答えてくれた。



# 東京オリンピック聖火ランナー



道路脇で聖火を待つ



聖火の受け取り



前のランナーとテレビカメラにポーズ



沿道の応援に笑顔で手を振る



車上や沿道のカメラに緊張



次のランナーに聖火を託す



# 師団通称についての採用と照会



## 北東北の盾 玖師団 (1)

第21普通科連隊 3等陸曹 仲村 真

令和3年6月2日、師団最先任上級曹長 綿引准尉から一つの提案を受けた。「この意味を広報陸曹である君が考えたというなら、投稿文・読み物として公表してみないか、第9師団の新たな通称を全国に周知する為にも、通達だけでは表現しきれない細かな意味を記す為にも、やってみる気はないか」と。それは新たな師団通称が発表されて僅か2日後の事であった。

『北東北の盾 玖師団』

青森・岩手・秋田に所在する第9師団隷下部隊が様々な案を出し合い完成した第9師団の新たな通称である。その際ありがたくも私の提案したアイディアの一部が『玖師団』として採用されたのだが、それを知った綿引准尉より激励とともに師団最先任上級曹長メダルを頂いたのだが、その折に歓談した際、文字に込めた意味について語ると冒頭の提案をされ本稿に至った。

始まりは3月半ば頃の師団通称新設に伴う募集で、私は早速考え始めたのだが、早々につまずいた。問題となったのは日本国内における地域としての「北東北3県」を形容する適切な言葉が見当たらないことであった。歴史に地続きである自衛隊の通称である以上、北東北という地域を一言で語れる言葉が欲しかったのだが、どれだけ古い文献を探しても見つけられなかった。むしろ古いほど東北の地は奥羽山脈を隔てて東西に異なる地域とされており、畿内（京都）から見て、奥州は日本の東端、羽州は日本の北端と考えられていた。北東北という区分は比較的に新しい概念であったのだ。結局、北東北の区分で括られるものの中で知名度や歴史があり1番伝えやすい表現というのが、他ならぬ自衛隊の「師団」という区分名だったのだ。そう考えれば「師団」を含んだ通称の方が、一般の方にもそれが自衛隊の何処かの部隊の通称であることが伝わりやすいという考えに至った。

〈つづく〉



# 師団通称についての採用と照会



## 北東北の盾 玖師団 (2)

次はナンバリングネームである『9』をどのようにして表現するかであった。どの時代で名乗っても第9師団を連想させるものであって、歴史と未来を内包した言葉は無いかと色々読み漁った。そこで見つけたのが『九』の大字である『玖』だった。

文字単体では『美しい黒い石』という意味があり、この場合の『石』とは、古代史的な玉(宝石)を意味し、転じて宝物としての意味合いも持つ。また文字の作りは玉(宝石)を表す『王』と時間の経過を表す『久』により成り立つことから、これらは第9師団の前身である旧軍の第8師団が、その精強さから「国宝師団」と呼ばれたことに対する尊敬とその伝統と誇りを継承する決意の思いを込めた。さらに黒はすべての色を混ぜることで誕生する色なので、様々な色(諸職種)が混ざり美しい完全な黒色となる意味も忍ばせた。

この様な道のりを経て、郷土に根差す、古きを継承し未来へ託すという様々な思いを詰め込んで『玖師団』という言葉に至った。これから第九師団が続く限り残り続けるものとして、その一翼を担えたことはこの上ない幸せである。これを機に多くの人が第九師団と言えば『北東北の盾 玖師団』と知ってもらえたら嬉しく思う。



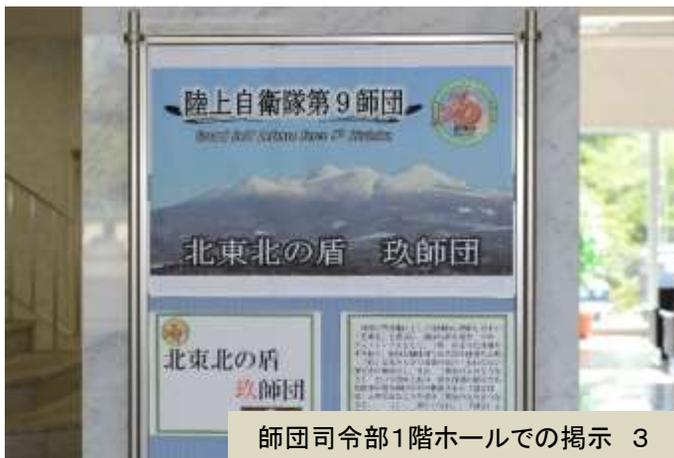
# 師団通称についての採用と照会



師団司令部1階ホールでの掲示 1



師団司令部1階ホールでの掲示 2



師団司令部1階ホールでの掲示 3



師団最先任上級曹長 綿引准尉との  
記念撮影



# 令和3年度自衛官候補生修了式



## はじめの一步

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐1佐）は、令和3年6月25日、秋田駐屯地において、「令和3年度自衛官候補生修了式」を実施した。

初夏の日差しが降り注ぐ中、41名の自衛官候補生は威風堂々と入場し、教育修了申告、連隊長賞授与、2等陸士任官申告をした後、力強くサービスの宣誓を実施した。その後、各区隊長たちが万感の思いを込めて一人ひとりに特技課程教育の配置先部隊を伝達した。

また、任務により不在の五十嵐連隊長に代わり教育隊長を務めた副連隊長 平野2佐が式辞を代読した。「入隊からわずか3ヶ月の間に、見違えるほど凛々しくそして逞しく成長した諸官の姿に接し、連隊長として頼もしく思う。入隊式で要望した『使命感と誇りを持って』『自らを鍛え、仲間と団結し困難に立ち向かえ』を同期の仲間達と多くの試練を乗り越え具現したものと確信する。同期との絆を一つの宝とし、助け合いながら努力を積み重ね成長してもらいたい」と述べ五十嵐連隊長の熱い思いを代弁した。また平野副連隊長は教育隊長として見届けた思いを語り、皆協力し合い団結し、愚直に努力し絆を結んだことを称賛し「元気いっぱいの諸君に出会えてよかった。これからも応援していく」と激励した。

そして来賓祝辞、祝電披露に引き続き、自衛官候補生 吉田翔栄が、「私達41名は、新隊員として目標をしっかりと持ち、基本を大切にして同期の絆を益々深め、どんなに辛く苦しくても挫けることなく、第21普通科連隊の自衛官候補生課程教育修了隊員としての誇りと自覚を持ち、今後なお一層努力することを誓います」と答辞を述べた。



# 令和3年度自衛官候補生修了式



連隊長賞授与



宣誓文の提出



式辞



答辞



# 航空機体験搭乗



## SKY HIGH

陸上自衛隊秋田駐屯地（司令 五十嵐 1佐）は7月4日、第9飛行隊（八戸）の支援を受け、駐屯地において航空機体験搭乗を実施した。晴れ渡る空の下、体験搭乗に訪れた方々は貴重な体験だと喜びを露わにしていた。控室で搭乗説明を待っている際は、八戸から飛んできたUH-1ヘリコプターがローター音を鳴らしながら駐屯地上空に近付くと、つつい見えぬ天井に視線を向けていた。その後第9飛行隊から安全説明を、駐屯地広報室長より搭乗説明が行われ体験搭乗が始まった。

搭乗に際しては耳の保護のためのヘッドセットを装着し、思ったより強いダウンウォッシュ（ヘリが起こす下向きの風）に驚きながらも期待を胸に乗り込んだ。中には次のフライトを待ちながら「高いところ少し怖くて」と漏らす人もいたが、パイロットの卓越した技術から繰り出される操縦を体験すると、一様に「全然怖くなかった、飛行機とも高層ビルとも違う特別な体験ができた」と満面の笑顔で答えて下さった。

計7フライトに及んだ体験搭乗は、約10分という決して長い時間の飛行ではないものの、多くの方々に忘れられない夏の思い出を残した。郷里の自然を空から俯瞰し、また飛び立つヘリコプターを見上げたり、着陸するヘリコプターと一緒に記念撮影したりと、地域の皆さんと思い出を共有するとともに、秋田駐屯地との確かな絆を深めて航空機体験搭乗は終了した。



# 航空機体験搭乗



安全説明



搭乗風景



離陸の瞬間



上空から手を振る皆さん



上空から手を振る皆さん



着陸後にヘリコプターと記念撮影



# 駐屯地史料館見学



## 五百年の時を超え

第383会計隊（会計隊長 金1尉）は、令和3年7月8日、服務教育の一環として駐屯地史料館を見学した。

駐屯地史料館には多くの記録が保管されており、その内容は旧軍の記録から自衛隊の活動記録など多岐に渡る。県外者を多く有する会計隊にとって秋田の歴史も包括する史料館は真新しい発見にあふれている上、加えて今回の見学はいつもとは一味違う特別なものがあった。それは史料館の展示物を紹介中に知った不思議な縁で、見学に参加した会計隊小松3曹と史料館に展示紹介されている郷土出身の旧軍士官が時代を超えた縁でつながっているということだった。

二人の縁をつなげたものは、秋田の歴史を紐解けば必ず出てくる『由利十二頭』と呼ばれる武士たちである。それは室町時代に秋田県由利地域に下向した源氏の名門小笠原氏支流十二家を指し、その内の2家の末裔が前述の二人の生家だったのだ。それは本人を含め皆に驚きを与え、その瞬間まで見聞きしていた歴史資料が突然自分たちの血肉に繋がる現実として降り注いだ瞬間でもあった。それからは自由見学となり、各人気になるブースに足を運んで見学し見識を深めていった。

そして見学も終わりに差し掛かったころ、小松3曹が衝撃の一言を放つ。先述の旧軍士官とは別の写真を見て「この人は自分の先祖かもしれない」と言うのだ。聞けばたまたま同じ苗字の写真を見かけたので紹介文を読んでみたら、出身地が町内まで同じだったそうだった。その後、詳細を調べると間違いなく同系の小松氏と判明し、今度は案内した隊員も含めて驚愕することとなった。

隊員たちにとって秋田の歴史や先達の足跡を辿った小一時間は、自衛官として多くを学んだひと時であった。また稀にみる発見もあり、案内した広報室にとっても実りあるものとなった。

今回関わった全ての隊員はそれぞれ郷土部隊に所属するということをも改めて考えさせられ、歴史やルーツなどあらゆるものが蓄積されて現在の我々に到るという責任と伝統の重さを理解し継承することとなった。



# 駐屯地史料館見学



史料館の説明



秋田に所在した部隊のブース



展示物の来歴を説明



郷土出身の旧軍士官のブース  
(左から2番目が小松3曹)



災害派遣活動記録ブース



自由見学



# 駐屯地野球部交流試合



## 世代を超えた好敵手

『子供たちに試合する機会を与えたい』児童自立支援施設 秋田県千秋学園より秋田駐屯地野球部（監督 小玉1曹）に交流試合の依頼が来たのは夏の日差しが強くなる前、6月の話であった。園長先生に詳しくお話を伺うと、全国大会常連の彼らにとって試合とは東北予選と全国大会といういずれにしても県境を越える試合であり、新型コロナウイルス流行後はその全てが出来なくなっているという。そのような事情であるならばと二つ返事です承した駐屯地野球部は、7月9日秋田県立中央公園内にある野球場で交流試合を開催するに至った。当日天候にも恵まれて絶好の野球日和。入念にウォーミングアップを済ませ、しっとりとした額に汗がにじみ出てきたところで試合は始まった。

先発は初の女性部員である重迫撃砲中隊 佐久間茜1士が登板し、切れのある速球を投げ分けて打者を翻弄した。打撃では指名打者として副連隊長 平野光哉2佐が出場。「久しぶりの野球だけど足を引っ張らないように頑張る」と語った平野2佐は打席に立つと子供たちに負けないフルスイングで白球に向かった。

駐屯地野球部は高校野球出身者も多く、市内の草野球リーグで幾度も優勝している猛者揃い。自分たちとの試合の中でゲームができる楽しみや、我々の技術を少しでも吸収してくれたら嬉しいと語っていたが、いざ終わってみると隊員たちは「我々の方が学ぶことが多かった」と口々に語る。特にキャッチャーを務めた第3中隊 中村亮介3曹は「一心不乱に白球を追いかける子供たちの姿に初心を思い出させてもらった」と語っていた。

試合を終え健闘を称える自衛官とそれを受け取りはにかむ子供たち。数奇なめぐり合わせで実現した交流試合は、双方に素敵な時間と大きな体験をもたらした。終了した。



# 駐屯地野球部交流試合



一生懸命白球に食らいつく子供たち



投打で活躍した佐久間1士



送球と進塁のせめぎ合い



試合に対する思いに年の差は無かった



子供たちに負けないフルスイングを見せる平野2佐



豪快なバッティングを見せる富樫2曹



# 修親会及び曹友会合同による 清掃活動



## 毎朝の道を綺麗に

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐1佐）は、令和3年7月18日秋田駐屯地周辺において、修親会（約40名）及び曹友会（約40名）合同による清掃活動（ボランティア活動）を実施した。

修親会及び曹友会は年間を通して様々な活動に取り組んでおり、今回は日頃からお世話になっている近傍地域の皆さまへの恩返しも含めて、合同での清掃活動を行った。

朝8時に集合した隊員たちに対し、五十嵐司令は「清掃活動（ボランティア活動）といえども作戦と捉えて、遊兵を出さず如何に効果的・効率的に実施できるか考えて臨もう」と述べ、自衛官にしかできない統制の取れた動きによるあっと驚く効果的・効率的なゴミ拾いの実現に向けて動き出した。

駐屯地正門前の道路は『自衛隊通り』と呼ばれ、古くから秋田駐屯地が地域に根差していることを教えてくれる。隊員たちは自分たちの職場の名前の付いた通りを日頃の感謝も含めて丁寧に清掃して回った。その後日差しが登りきる頃、最後に駐屯地内にある慰霊碑周辺を清掃し、予定の区域を完了した。清掃に参加した隊員は「少しずつ綺麗になってゆく様が嬉しかった」「日頃敷地内で訓練しているため、近傍で自衛官として活動するのは新鮮だった」とそれぞれ思いを語っていた。

地域との交流を深め、また、郷土部隊である自覚をさらに強めた清掃活動はほとばしる汗と満面の笑顔に包まれて終了した。



# 修親会及び曹友会合同による 清掃活動



近傍の線路脇の清掃



外柵に面した自衛隊通りの清掃



家族連れで参加する隊員も



慰霊碑付近の清掃



# 一般企業向け生活体験



## 新たな出会いと懐かしき再会

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐 1 佐）は令和3年7月19日、住鋳テック株式会社能代工場の皆さんをお迎えし、生活体験を実施した。夏の暑さが厳しくなる前「今年入社した3名に対し秋田駐屯地において生活体験を経験させてほしい」と依頼を受けた駐屯地は新型コロナウイルス感染対策・安全管理・体調管理を万全に整えた上で可能な限り体験できるよう準備をしてお迎えした。

当初、陸上自衛隊や秋田駐屯地の活動状況などの説明を受けた後、戦闘服に袖を通し体験は始まった。午前中は駐屯地各施設の案内・史料館見学を行い、その途中教場では戦闘訓練を終えた直後の汗まみれの新隊員たちが武器を整備していた。通り雨に遭ったような戦闘服の上着を脱いでいた時、懐かしい再会をする。この度参加された3名の方々は同じ高校の出身で、同級生が今年入隊したと語っていた。教官に許可をもらうと、二人の隊員がやってきた。僅か数カ月と言えど、それぞれの職場で経験を重ねた同級生たちは一瞬お互いが分からず、一拍置いて気づくと「（高校時代と）変わったな！」と笑い合っていた。

駐屯地隊員食堂で舌鼓を打った後、短い距離での行進訓練やロープワークを学び、最後に体力検定種目にチャレンジして終了した。

僅か一日ではあったが体験を終えて皆さんは「優しく丁寧に案内してもらい勉強になった」「様々な紹介を受けて自衛隊の格好良さを知った」と語って下さり、新たな交流を図るとともに、自衛官たちにとっても良き思い出となった。



# 一般企業向け生活体験



史料館見学



同級生との再会



自衛隊の食事を堪能



行進体験



体力検定体験



記念撮影



# 土崎夢花火支援



## 夜空を彩る願いの光

秋田駐屯地（司令 五十嵐1佐）は、7月21日、港商友会まちあかり委員会が実施した『土崎夢花火』を支援した。

このサプライズ花火イベントは、秋田駐屯地が所在する土崎港町の港商友会まちあかり委員会が、新型コロナウイルス流行によって、お祭り等の伝統行事が相次いで中止となる中「一人でも多くの方々に元気や勇気を与えたい」と計画され、今年も昨年引き続き実施することとなったため支援させて頂くこととなった。昨年同様、新聞やインターネットで情報が公開されたものの、観覧による密集を避けるため、打ち上げ場所に関してはその瞬間まで秘密にされた。

夏の日差しが照り付ける中、花火師の皆さんが到着して設営をしていると、郷土部隊ならではの一幕があった。設営スタッフの休憩中一人の隊員が声をかけて来た。聞けば子供のころの同級生だといい、僅かばかりの休憩時間に懐かしい話で盛り上がり、またの再会を約束していた。

夜の帳が下りた頃、19時からの15分間に土崎港町各所で一齐に花火が打ち上がり、駐屯地だけでも百発を超え、町中の夜空を彩った。駐屯地所在の隊員たちもスマートフォンを片手に堪能し、夏の思い出に刻み込んでいた。

駐屯地司令 五十嵐1佐は「活力のある駐屯地」「地域と共に」を要望事項として掲げている。未だ衰えを見せない新型コロナウイルス流行の渦中、蔓延する暗い雰囲気や苦労を地域と分かち合い、これを打破する為の企画に駐屯地もその一部として支援出来たことは、全隊員の誉であった。多くの汗と努力で生み出された花火イベントは、駐屯地内外に素敵な笑顔を呼びこみ、大成功を収めた。



# 土崎夢花火支援



設営風景



駐屯地上空の花火



駐屯地上空の花火



# 高校生インターンシップ



## 夏の思い出

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐1佐）は、7月27日から29日の間、自衛隊秋田地方協力本部の依頼を受け、秋田県内の高校生に対するインターンシップを支援した。

今年は県内高校33校93名（男子74名、女子19名）が参加し、訪れた高校生たちは、緊張した面持ちで駐屯地の門をくぐった。

3日間に渡り実施されたインターンシップでは、数多くの訓練体験や生活体験が行われ、各種入隊制度の説明、天幕（テント）展張体験、救急法体験、ロープ結索体験、装備品展示、格闘体験、至近距離射撃訓練展示見学、各職種の仕事見学等が行われた。

各種体験の中では学校で学び修めた特技を遺憾なく発揮した高校生もあり、現職の隊員を驚かせるほどの場面もあった。特に格闘体験では空手部やボクシング部といった格闘系運動部の高校生たちが隊員助教とともに各種打撃の違いを展示した他、基地通信部隊の研修でLANケーブルによる通信網工作体験では電気工事士の資格を持った工業高校の生徒たちが早く正確な工事で完成させるなど、一部では即戦力になるほどの腕前を披露する場面もあった。

その他、隊員と同じ食堂で食事したり、売店で迷彩グッズを買い求めたり、遠方在住の高校生は宿泊したりと、それぞれが目一杯秋田駐屯地の時間を満喫した。

全ての課目が終了し、今回の感想を尋ねると「テレビ等では解らないことを知ることが出来て勉強になった」「自衛官になりたい気持ちがより強くなった」「入隊できるように頑張りたい」など、熱い思いを沢山貰うことが出来た。

来年の春、今回参加した高校生たちが、我々と同じ制服に身を包み、頼もしい後輩となる姿を夢見てインターンシップは終了した。



# 高校生インターンシップ



ロープ結索体験



昼食風景



天幕(テント)展張体験



格闘体験



至近距離射撃訓練展示見学



救急法体験



## 第3次野営訓練



### 練習は本番の様に

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1佐）は、令和3年9月5日から10日までの間、岩手山演習場において、第3次野営訓練を実施した。

本野営は「実弾をもって実施する戦闘訓練」をコンセプトに、諸職種協同による総合戦闘射撃、重迫撃砲中隊実射検閲及び迫撃砲夜間射撃訓練を実施し戦闘力の向上を図った。特に五十嵐連隊長は野営開始にあたり「実際の戦場の様相に近似した状況の中で、各隊員は本当の実戦で戦っているとの意識のもと臨んでもらいたい」と述べ、本野営における訓練の企図や隊員に期待する自身の思いを熱く語った。

実際の戦場の在り方を追求した総合戦闘射撃は、敵の発煙による視界不良、ガス攻撃による防護マスクの装面、敵の砲弾による負傷者の発生等、過酷な状況が次々に付与されていった。特に実戦を投影するための新たなアイデアとして、大型スピーカーによる大音量での爆撃音や航空機音の現示が行われ、命令号令の伝達はいつも以上に困難となり、実戦さながらの状況はより過酷度を増した。また、重迫撃砲中隊は、実際に戦闘行動を伴った他職種との連携下にて検閲に臨み大きな成果を得た。夜間射撃では照明弾下における着弾観測が演練され、暗闇での正確な射撃動作及び観測による誘導が行われた。

6日間に渡って行われた本野営は、類を見ない実戦的な状況下で行われ、各部隊・隊員に多くの経験と教訓を残し終了した。



# 第3次野営訓練



発煙弾による妨害を受けながらも前方を監視する隊員  
(岩手山を隠しているのは雲でなく発煙弾による煙)



林内に設置された的を発見次第射撃



観測からの報告を受け射撃計算する射撃指揮班



重迫撃砲射撃



夜間射撃



離脱支援の為の地雷敷設